

## 平成27年度 経済建設委員会行政視察報告

### ●参加委員

委員長 右田芳雄

副委員長 宮川英之

委員 藏成幹也、馬越帝介、氏永東光、山下 宏、桜森順一、大田たける、  
部谷翔大

### 1 視察月日

平成27年7月7日（火）～9日（木）

### 2 視察先及び視察事項

- ・滋賀県長浜市 黒壁を中心とした市街地活性化について
- ・新潟県十日町市 温泉トラフグ事業化支援を通じた市の産業振興と新事業創出の取り組みについて
- ・静岡県富士市 富士市産業支援センター（f-Biz）について

### 3 視察目的

- ・市街地活性化の成功事例として、取り組みや課題について現況調査を行い、市街地のにぎわい創出の方策について参考とするため。（滋賀県長浜市）。
- ・陸上養殖の先進的な事例として、関係団体との連携や課題等について現況調査を行い、地域の新たな事業・特産品を生み出すまでの市の支援について参考とするため（新潟県十日町市）。
- ・産業支援を核とした地域活性化を図る上でロールモデルとなる、先進的な取り組みを調査するため（静岡県富士市）。

### 4 視察概要

#### （1）滋賀県長浜市 黒壁を中心とした市街地活性化について

##### 内容

長浜市は、観光資源を創造し、それを生かして市街地活性化を推進する観光型まちづくりに取り組んでいます。

昭和40年頃から商業機能の郊外化、商店街の空き店舗化が進展していたことから、第3セクターである（株）黒壁を設立し、商店街の再生に取り組み始めました。

検討の結果、（株）黒壁では地場産品にこだわるのではなく、また、地場産業に影

響もない「ガラス工芸」という観光資源を取り入れた活性化に取り組むこととし、平成元年の黒壁ガラス館（1号館）の整備に始まり、現在では（株）黒壁の店舗は30店舗まで増加しています。低未利用化しつつあった町家の改修を行い商業機能を導入し、町並みを整備する事業展開をしていく中で、生活商店街から商業観光商店街へと変貌していき、15年間で100店舗が新規出店するなど市街地活性化が進み、全国から多くの観光客を獲得しました。

平成元年のオープン時に9万8,000人でスタートした来客者数が、ピーク時の平成22年には260万人となり、平成26年度までの経済効果は年平均に換算すると160億円にのぼっています。

ただ、平成12年度頃から徐々に赤字に転じており、原因として、近年の来客者の消費動向の変化や、日帰り客の増加などが考えられます。また、固定費比率が高いことも要因の一つであり、経営改革が課題です。

そして、近年では市街地の居住人口の減少や空き家の増加など課題も顕著になってきており、持続的な活力の維持に向けて、これまでの取り組みで導き出した「商業」と「観光」の視点に、「居住」という視点を付加し、交流人口の維持と質の向上、都市機能の集約・強化、まちなか居住の推進に向けて現在取り組んでいます。

### 所感

（株）黒壁は第三セクター方式であるが、民間企業の経営者がリーダーシップを発揮し、行政がそれをうまくフォローする形で運営がなされており、そこから生まれる思い切った経営が交流人口の獲得につながっていると感じました。

ただ、市内の一角の市街地再生に成功したといえますが、その効果が市内全域に波及するまでには至っておらず、その効果を維持し、拡大・展開していくための新たな取り組みがこれからの課題となると思われます。

本市においても、人々が中心商店街と一の坂川周辺とを行き交い、回遊し、滞留することで地区に賑わいをもたらすことを目指しており、市街地の賑わい創出の方策について、大いに参考にしていきたいと考えます。



## (2) 新潟県十日町市 温泉トラフグ事業化支援を通じた市の産業振興と新事業創出の取り組みについて

### 内容

十日町市では、地元の企業や個人の出資によって設立された（株）エヌプラスが温泉水を使ったトラフグ養殖に取り組んでいます。「とおかまち雪国温泉とらふぐ」のブランド名で平成26年12月から出荷し、地域の新たな特産品として注目を集めています。

十日町市は海に隣接していないため、以前からとらふぐの養殖が行われていたわけではありませんが、温泉の成分が海水成分と近く、地元温泉資源が養殖に活用できることや、高付加価値商品として販売できることから、養殖を開始しています。プランクトンの代わりに養殖用のえさを使用するため、無毒のフグとなることや、海水より塩分濃度が低くフグへの負担が少ないため、成長が早く、出荷を早めることができるメリットがあります。また、漁業権の制約もなく、温泉の利用権も地元研究会員が持っています。

出荷前に塩分濃度の高い水槽に移し、泥抜き、味揚げを行うため、注文から出荷までに3日を要し、緊急の出荷に対応できない課題があります。また、水温を20度から25度に保つ必要があり、冬期の水温管理を低コストで行うことができるように、バイオマスボイラーを採用していますが、燃料代や餌代のコスト面で課題が残っています。

養殖場は、市の温泉施設に隣接する温水プール棟が遊休施設となっていたため、これを改修し、養殖水槽5基を設け、年間約3,700尾の養殖に取り組んでいます。

販路に関しては現在、十日町市と津南町地域の飲食店や宿泊施設に販売を行っており、味、食感ともに天然物に負けないとされ好評を得ています。今後は事業を拡大し、設備の拡大も視野に入れ、1万匹の養殖を目指し、地域活性化の一翼を担う取り組みを行っていききたいとの説明がなされました。

市は温泉トラフグ事業化支援事業として、養殖施設の改修や3年間の無償貸与、地域産業としてのPRや販路開拓支援、補助金の申請など、後方支援的な役割を担いサポートを行うことで新事業の創出に至っています。

市の施設と温泉の有効利用を図り、付加価値の高いトラフグを活用した新たな事業を展開することにより、地域活性化の源となっています。

### 所感

海のない場所で、地域の新たな特産品を目指し付加価値の高いトラフグ養殖を選定したことは話題性があり、非常に先進的な取り組みであると考えます。

地元の雇用を増やすためには、設備の拡大と養殖数の増加等の必要性を感じましたが、その反面、収益力の不安も感じるものでした。

山口市も水産物供給基盤整備事業においてモクズガニの陸上養殖に向け実証実験に取り組むとしていますが、同時に雇用と収益面に関しての研究が必要であると考えます。

今回の視察では、新事業創出における関係機関との連携の重要性や、商品開発、販路開拓など非常に参考となる点が多く、今後の政策提言に生かしたいと考えます。



### (3) 静岡県富士市 富士市産業支援センター (f-Biz) について

#### 内容

富士市では、産業振興施策を体系的、計画的に推進するため、平成18年に「富士市工業振興ビジョン」を策定し、中小企業のあらゆる問題の解決と起業・創業の支援を行うワンストップサービスの拠点として、富士市産業支援センター (f-Biz) を平成20年に開設しました。

相談業務においては、現在7名の相談員が常駐し、相談者とのコミュニケーションを密にとり、同じ目線に立った個別支援を重視しており、視点として「セールスポイントの発見・活用」「ターゲットの絞り込み」「他企業との連携」を挙げています。年間の相談件数は約4,000件ののぼり、同様な公的支援機関と比べて群を抜いています。

同センターの特徴でもあり、魅力でもあるのは、結果にこだわったコンサルティングです。コンサルティング指導を求めてくる企業の悩みの多くは売り上げ低迷にあるとの分析で、いかに、その企業が持つ真のセールスポイントを引き出し、売り上げ回復、上昇につなげていくかにポイントに置いています。そのために求められるのは質の高いコンサルティングであり、知恵の出せる相談員を資格や経

験ではなく、資質・実力本位で確保することが支援機関運営の成功の秘訣であるとの説明がなされました。

今後の展望として、富士市では起業者数の累計目標50人の達成を目指しています。今後も、民間ノウハウを活用した公的産業支援機関であるf-Bizの活動を積極的に進め、起業前の支援、経営安定化のための起業後の支援、さらには成長支援を推進することで、産業支援を核とした地域活性化が進展することが期待されます。

### 所感

これまでの中小企業支援センターが、目標設定がなく、責任の所在が不明確で、ニーズを汲み取った運営をしていない等の問題もあり相談件数が伸び悩んでいるのに対し、f-Bizは来場相談件数の目標設定を行っており、また、対話を通じた個別のアドバイスにより結果を出している全国一の成功例であるといえます。

同支援センターが関わり成功を収めた相談所の紹介もあり、資質・実力のある相談員の確保は非常に重要であると感じられました。

本市においても、中小企業支援、起業支援の強化は重要であり、また、新山口駅重点エリア拠点施設整備においては、起業創業支援センター機能の導入が予定されています。本市の課題を整理した上で、今後の取り組みについてさらに議論を深めていきたいと考えます。

